

一十度のみとは、縦ば十人丸く居て、盃を十中に置いて、先壹人盃とてうしを取てはじめさせ申し、さて次の人にはさして、其人にてうしを可渡、扱又次の人のみて、前のごとくすべし、まはり酌也、盃を請取てから、銚子を人に渡し候迄物をもいはず、肴をもくはず、口をものごふべからず、若さやうの事あれば、とがおとしをのませらるゝ也、盃は人の器用によりて、三ど入白土器などにても侍る也、あひの物などにては、見をよび候はず候つる、とがおとしの盃はあひの物五ど入などにて候し、又十度のみの盃には酒の入候程墨を付候、

一鶯呑とは、兩人出て十はいとくのみたるを勝と申候、盃不定候、

〔大草殿より相傳之聞書〕一三星揃之事、星の臺を我前へ酌持てこへられたる時、禮儀いつものごとく、自然先はじめ候へば、左右を見合て、三星の中の盃を取おろし、我左の盃をとりて、三ぼしの臺の上にて酒をうけ候、そばにて酒を請てのみて、盃の下をば右の方の盃に入て、其盃をば臺の上以前の所に置て、又右の盃を取て酒をうけてのみて、盃の下をば臺の下におろしたる盃に入て、又臺盃をば以前の所にをきて、又とりおろじたる盃に酒を請て、恐惶の人には酒をたべて、貴人の御前に盃を持て參り、いたゞきて手渡しに申也、臺の盃ニツは酌取候人持てまいられ候、一三ツぼし等輩よりさゝれたる時は、中の盃をいたゞきて、左の盃にかさねて、酒をうけてかさねながら下に置て少のみ、下の盃にうつし、上の盃をば臺のそばにをきて、うつしたる酒を又のみかけて、右の方の盃にうつし、先の盃をばほしの上に、已前の所に置て、又右の盃の酒をのみて、其盃又以前の處にをく、其後におろしたる盃をいたゞき、中にをきて人にさし候、恐惶の人には已前のやうに持參してよし、等輩には臺の上にすへてさし候、此分は下戸の仕合に候、上戸たりとも、先此分に仕候て、人によりしいられ候へば、又三ぼしにて一ツづゝ、三ツたべ候時は、最前の仕合たるべく候、又盃をはじめ候とき、人よりおさへ物給候時は、我右の方の盃をたべ候時は、さ